



海防の集
乙



く集煉を

立秋

目も及くく半れあひらやうの秋
 妹も月やきく、何となく起あ、ろ
 富草ハ花のほしやと秋の秋
 秋も月やふやめるさの秋
 多むハ空あしやあさの秋
 秋も川や車と高尾鶴半



下
燐の月やおもきくくくく
極の味も花の露さちやなごの秋
秋の月や竹のこぼれは吹とく

萩

新島やおそろしき女地をいよ
あさう月や起るんはのわしは
新島かとくもくく夜の明好ら
新島乃傳を起る月咲りど

何とくもや聖いさくくきくく
新島かとくもくく夜の明好ら
あさう月や起るんはのわしは
新島や東士のあさうは見えし

七夕

偶もはりきりきりきりきり
牛もあさく牛もあさく男も七
新島は萩の本橋を二ツ星

家鶴も淵もあらうん天の川
鶴やとと一筋のともへる
麻糸もたつとと女七夕
星合や人をま田の山とあれど
雨あつと
あつと平な川水も星
七夕や星と増れ水はひ
あらうと星と行つとや列も星

稲妻

稲妻や風速く来と抜るり
稲妻やをくたさ入後の舟
いふはまや今もをぬ樹も川と
稲妻やおらうと舟と抜るり
稲妻や船へもてさうハのそと

萩

布城の淵——きけや萩のむ

いと蘇方川のちるささちあ咲
秋のもののこころぬゆとささの花

紅葉

里ハまゝ田ノ草も水方生身魂
又兵乃恋を果すり新地山鏡
一葉ゆかけし出乃わさる地鏡
玉の珠の弱きをゆきし定ぬ
おきのめくまひし枝さけ

くたのゆき人のくまひや物さる
木槿咲くぬるまひし遊交
葉の香を案旨遊和冬の月

山町

清く水あらし川越は踊ら

木槿

夜も月影に廣く木槿のゆき
物乃千とわさるまひし遊木槿い

連のあはれまふハ咲ハヒ 木橙、
起揚ハ 糸ハ 木橙の 糸ハ、
一ハヒ 海ハ 淋ハ 糸ハ 木橙ハ
編書ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ
糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ

蒼

雨のあはれ 糸ハ 糸ハ 糸ハ
糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ

土橋ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ
糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ
糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ

燐石有感

糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ

糸ハ

糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ
糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ 糸ハ

め市洋おしやうおしやうおしやうおしやう
白粉の系おしろいおしろいおしろい

茶

蘭の香らんのかうらんのかうらんのかうらんのかう

るおのた

らおの香らおのかうらおのかうらおのかうらおのかう

八期

帳子ちやうしちやうしちやうしちやうしちやうし

八期はちきはちきはちきはちきはちき

雨あめあめあめあめあめあめあめ

八はちはちはちはちはちはち

八はちはちはちはちはち

小印月

結むすむすむすむすむすむすむす

結むすむすむすむすむすむすむす

結むすむすむすむすむすむすむす

良夜

名月や花を埋え玉の川
起てつと人の家あはれ月見は
名月や一ちうはうさくどすし
名月や山あむくハ山あむく
名月や花ふりしる種乃聲
あハ月や在るる梅ハ枝ハ
名月は花盛人ヤ孫まき

名月やあはれ根きハ月の名は
名月やあはれ名はハあはれ

月並の時の秋あり
池とめくは他路の一回おと
多介ハ好月の金とを謝願

名月やあはれね種も水もす

名月小雨あり

雨の月草あはれと深き
朝すはれ景えり流や白乃月

福井の記

新井田も毒中一と云ふ月には

蝕の月

其のくハおのの存じみの月

其下如クハ流れても足むりの月

その月水く月をハ忌物丹

十六夜

いそふや草十とくし 神むし

いそふりやまき集士乃火もおろぬふ

十六夜も初見のむら白ひげ

いそふりや炭捲も川ぬら

十六夜やうらうらまの乳も足

立待 居待

虹おしーんくろんぬうふ十七夜

立待やお糸の名も似るおと

立牛もおろしゆや指は月

秋

秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと

雁

秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと

秋

秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと

秋

秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと

秋

秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと

秋

秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと
秋の品の人々もさうさうと

菊のりは鏡十もたしや

終

夕ぐれのせめき声や片くはる
節まゝとを己を答へてはる

終

一軒の海の中まひしよき
夕空の戸も暮かたし福の那
空府のちみはしりてくまはる

きんぎょ月あつた交りしき

一さうり山も撫させぬ
小舟の波節のぬれもるう
想はぬまを慕ふまはる
終平の己をまひし

亂

強ひたるとはたはれぬく
しるはるまのふし

葉山子

手うぢくハ口し振くたきか
川末古回の上と物葉山子
淋しさと親も子とかくし
佛法の石不換れく葉山子
何となく、指さるされくあし
葉山子乃らくよくと葉山子

精吟

歌う物も心もなぬ 晴晴うら
風の口は風もほろ晴晴
赤城の尻くすくとぬゆけり

夢春死

梅香もたえくしと花
云り目れあうる有物あはたの

略

歌う物も心もなぬ 晴晴うら

作かしり月夜に袖味増やほの月
暮る友却り馬をとりぬる二夜
啼かき鳥乃園やれちのほき
あそびをよる山やほの月
伝の月栗の二子も面白く
田の底も五歩おつ和後の月

原

原の芦山ハ若くはらんう部

廿日くく白も霧松や一々の巻
けあそり松きく茶一原乃勢
果人ハ茶おつる以やおの聲
急そぬ松さいう一や原れ声
ねえそを樹も撰りほや一の声
原れまやふさをとれハ恨州
本現もね茶するねや原の声
原れまやねハ木と成くおと

飛

何の末の葉から秋の跡が
土橋の裏すくぬく跡が

川田

又舟の荷とぬく川田の跡
湖もかきとぬく川田の
ふし—このちりまの川田

舟

かきとぬく跡はぬく川田
月もす友かきとぬく川田
葉も池のすくぬく川田
うそ舟の本橋もぬく川田
小室もすすくぬく川田

宮

みいあぬハ十二とぬく川田

紅葉

川かさくしはきぬ紅葉うき
秋の日の望しきしきさふらむ

秋民のふと

道くも編乾とくみ葉うき

掃葉

掃ハ淋し掃ぬハ介秋のふ
きふくき馬ふししき株のふ
葉焼くふゆきしやあきのふ

白濁乃ユまをいふに秋乃葉

ふししき内ハあふさし秋のふ

ふし葉本もあり秋のこふ

霧乃後しきやあきのふ

り秋や夫婦後しき一羽

りあきや島の橋も萩の中

遠路おれきふ

晴ふき葉切割るや秋のふ

混雑

糸乃と堀乃を月好るに
口の中をく理格校乃答う那
糸乃や将、麻如山ふさき
白鳥のふも通一し明あ
あちむく厚もあし一し和あ
河原なく将やいらさうあ
あさるすもさう一しね柳

糸乃と堀乃又あけりく
糸乃や将あし一し山あ
糸乃や二つ一し一し
糸乃と堀乃あし一し
糸乃と堀乃あし一し
糸乃と堀乃あし一し

雨の中

糸乃と堀乃あし一し

善哉樹や枝を月のおもひぬ
四五羽引く争ふ声や鶴
此に又海を一葉や秋乃お
前あや水のふも松より
葉ふくわ一口流乃新のは
高と折力おなす 秋海堂
草花やわうさるる 筑戸
君の代の水々々川板の

錢別

送伴路樵吾

一きひハらてけり 草葉の神様

送晚梨金塔住

一里より北の(と)くすみきし

送互三
送互三

送互三
送互三

送互三

不ニ多ク自由や方と云ふの義ハ

送呂千

二交遊了道き生時此錦の如

送風五

海川此身不入る人や節此水

けり此義因りて
那川と送

道叶了打と捨る分沙あつひ

送幾曉店

水己く急く人あり流すく

送圓滿上人

花ふろやその光りのりしを

送枚阜

川其せ安達々原も田植初

水上の玉るの道中を送

社も野をたふしつる水たふ

送柳生

聖蹟の約乃 海もあつた

送既白坊

明也——夜も無事か一わつ

有来法師の彫刻の送既白坊

石も木も 紙も一歩の山路は

熊谷の空の中と送

ちち向ヶハおちむく人や仰ぐ花

送至桃之浴

土産を紙も——の紙もあつた

秋明人の遠くあつた玉手と
伴を憶ひく

い——きや 遠く——田舎の石一つ

玉手はけりし京の都と

新産——葉をともあれてハ花もあつた

彫刻の任と舞——
杉島の人乃ちあつた
仰ぐまよを送

了——わつたもあつた 花の月

送豆什

緑立ちしよん過らや駒むら

菊呂千々山陰さへ起と

菊乃香や那く東山の葵とこも

阿波の楓江を送く

秋かすく喜せね粟の鳴るやも

送加藤女

香をくし那風の柳の只むらり

送左阿

よん已すか山浜の菊小ゆはら

送可徳又子

城底のらん高もよりし紀子連

送不艾

後編やとれし一思も蔓も花

送左朴

とれし山浜一思も蔓も花

送伊勢五叔

錦ぬきや松ふりし 藤甲忘

浦島太郎を年毎念をた
四子神妙の語す

田くくく 羨む連をたこ登

重城の夢心を送る

径飛くく 一夜をくくしをた

送新修雪意

都人 都や 西条の山さく

於立 一夜泊を送

一声 廉もも ぬ夜明し

尾州の雪境を送る

雪のたをた 谷ひあ 田州時

そのりのるり 雪は雪中の
第一の詞を悟く

南 松ふりし 秋の

大深里沖の龍舟を送る

彼ちよ 紙木の 雪くく 下なる 竹

道百首

雲下さ月暮るも知れ葉うる

而列

新小孫く治もあき長もとうりう
こくありんかや義も枯れ
送る履も遊了や去の留
浦の秋治もむくくふく
岸もささぬみくもくれぬ

追悼

悼福地其行

ゆくやうに云りそ春の歌うハ

悼有来

あひさや琴割る積く文とハ

南枝り子孫の川あり
さあうりすと

あきとあふもかたしそら川

悼小松是富

そくせつとおのよしにたぐさうの坂

悼 忌千母

折るせんせうもくくの柳の

悼 桃塔法師

かたみち志りしと名も鳴りし

路由り卒おのりよるを

新そんじんかぶしあやうの折ね馬

桃只の母の巻

指咄んゝ結人もがしこり

恋秋子うた女を悼

お子板し羽や泪乃玉の如と

文えり父の巻

そくのみ恋しやとまのやま

盲人や有り父の巻を語りお

おのり月標し出れハ袖の巻

有旅の巻を語りお

何病くおこりさるのあはれ

坪里豊

人七年もいと還しと枯那

夕志、書を悼

山鳥も鏡見と鳴く雲あは

百舟の主意を失し

花あはれや辛夷小何ハあそぬとも

去又々花母あはれを

散る柳のとハゆふら

梅香法師と悼

鳥泣くふりや、蓮の海もあはれ

薬店兼洲と悼

草己々ハあはれゆふら

奉悼 梅葉院殿

あはれ目もあはれあはれ花の雨

書道屋又と悼

五り白也 英をリ河この藤了子

漆近河梁

於こころと在しうらーの藤系は

碑 孝例

老おや目者まよ 浦乃春

悼 悲色う書と悼

男子お跡 世にゆくを月まか

亡父十三回忌

男おーむや十之がねは 子の書

亡母五十四忌

永きりやおまへハ粟をかくれと

永昔祖父の百々忌

永小けむの枝をわ 塚乃松

妻林叟 十三十七回忌

居終月お控の供也 輝うし

年経ても永くぬ我のよふ海が

二川忠昭二十五回忌

ふきくや 氣ハれも 酒ノ水

悼 源宗左衛門

雪のりか しく けきく 氣切 節

柳自つ又の表

明くきく けきも 答りぬく 悔

時雨

出く 己れハ 風とく じき月ハ 氣

かろく 浦の 管 陸ハ 初ハ 氣

長明ノ 車ノ けき 初ハ 時 毎

結時 けき 氣ハ 結ハ けき

何れ 氣 けき けき けき 初ハ 時 毎

き 坂ノ けき けき けき けき けき

茂士ハ一年古カモ月一カ
橋乃五リハ花カ初下カ
市一也ハ菓一未カも一カ
有カハ初水一もカ初時
初一カハ不三ハ口カ
初一カハ義美ハ人と作カ

自得

名を置むふも心もそも

落葉

枯枝をまき一ハ落葉カ
きハ一まをかきつる
二ハ口乃風とカカカ
三ハカハカカカカカカ

小春

本の下カハ花カカカカ
あハカカカカカカカ

芭蕉忌

古道をりし人 笑ふ松竹の影
もや 芭蕉忌や 柳葉(り)り月(り)り
唐以 葉のそら 風もぬを 芭蕉
芭蕉忌や 柳葉(り)り 月(り)り
是 浅和 喜み 月(り)り 時 白(り)り
ちや 柳葉(り)り 子(り)りの 友(り)り 人(り)り

茶の花

杜若

二人 暮(り) 二人 心(り) 松竹(り)
日の 柳(り) 二 時(り) 松竹(り) の 影(り)
了 半(り) 風 踏(り) 杜若(り) の 影(り)
露 露(り) 乃 葉(り) ば(り) ち(り) 芭蕉(り) 忌(り)
鏡 鏡(り) 鏡(り) 芭蕉(り) 忌(り) 松竹(り) の 影(り)
おし ち(り) ぬ(り) 人(り) そ(り) う(り) 柳(り) 竹(り) の 影(り)
月 鏡(り) 人(り) 柳(り) 竹(り) の 影(り) 松竹(り) の 影(り)

枇杷りむ

なま〜目ふきあむハハと一本
む〜とのけりよまらや枇杷のむ
む〜と〜のハハと〜のむ

大根川

人心似る日もあり大根川
む〜と〜を驚くは流る大根川
かおきねのうりや大根川

鵜鷲

みそまぬお〜む〜む根うま
まよ〜や〜と〜の〜みぬお
〜と〜のい〜ぬまお〜一ぬお
外根と〜ぬまぬぬ〜みぬお

松尾花

つ月ま〜る〜の松もや松尾花
松尾月連ゆ〜と〜松尾花

初音和入さくをくちくちく
く月音や音みぬいすーりあの
けうくちく上しりーのいけ
初音やまのいん本よのいん
初音をきんーくのやんうの
初音や味くく川の中をれぬ
くくの音をきんきんくいんが
初音月大宮人や音きんりん

姪子講

七浦七流く年じまひす梅
さくはくも満干の珠やまひす梅

初音月

音音く音音のあけや音のあけ
音音初音く入や音く音

音音

音音く音音ぬ音あけ音音

水仙や筆子一筆もかき
舟のり世となくも命や水仙
お云りし筆もさの日もあつらひ

水鳥

水鳥や底を流ぬ下りみ見
舟もかきし一の池も蓮も
水鳥や筆子一筆もかき
二日かた子と一筆もかき

水鳥や流ハキ

水鳥

水鳥や筆子一筆もかき
舟のり世となくも命や水仙
お云りし筆もさの日もあつらひ

宗祖五百回忌

五百年ふもあつらひ

水鳥

懐ふくしむる水まのりる水水
 志直分川を世おろしかくる
 水の明く一羽とあつくちうり
 葉焼く人とあつくちうり
 稲、舟も枯葉とあつくちうり
 懐八

懐八やととを言ひし云乃上

笑

新音の鐘乃きるるをしう那
 人のきく、方をとのたくるを
 桑さあく、胸うしをををを
 新、地ふくのたぬさむさう子

細代守

を新心又命るん、たり細代守

新地、所、の、ま、ま、や、細代、を、
細代、を、お、も、ま、ま、も、流、り、を、
水、多、の、が、れ、し、ゆ、ろ、や、あ、り、を、

飯

飯、け、や、香、の、あ、る、ぬ、も、二、三、時、
蘇、ぬ、お、く、人、の、あ、し、ぬ、と、け、
飯、け、乃、お、か、む、し、の、あ、ま、

評加

その、蔓、乃、ほ、ら、と、ハ、な、れ、評、加、
病、乃、以、と、人、を、し、評、加、を、
京、乃、あ、く、な、れ、お、し、評、加、

を、声

を、声、や、一、夜、か、ぬ、る、松、乃、風、
か、し、か、つ、か、あ、の、び、ほ、の、川、而、

々、海、氣

人、乃、あ、ら、し、と、あ、り、る、海、こ、し、

さそ 山争う 喰いぬぬ 小舟まよひに
滴り 此がまゝに 舟をさし海流に
くさきくさき 舟をぬき せし海流に

火燧

ふと口の中 のよみとこころ
まよひ 舟をぬき 火燧の那

幸田三春

陰る 舟をぬき 舟をぬき

まよひ 舟をぬき 舟をぬき
舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき
舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき
舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき

大尾

舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき
舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき
舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき
舟をぬき 舟をぬき 舟をぬき

花をさる人とは春の餅乃と
 春へよみく懐しきやうと
 いそりしき人よ柳の年のうれ
 梅の香やかきく開きし月
 花の陰よりハ跡走の影
 詩小登り字ありきよかきぬ
 云葉もあははと花乃うりこ
 とをうり也
 花よ
 花よ
 花よ

花をさる人とは春の餅乃と
 春へよみく懐しきやうと
 いそりしき人よ柳の年のうれ
 梅の香やかきく開きし月
 花の陰よりハ跡走の影
 詩小登り字ありきよかきぬ
 云葉もあははと花乃うりこ
 とをうり也

花掃木

故の地の花を掃く
 花を掃く
 花を掃く
 花を掃く

花を掃く

千代 粟不三の裾腫ル
居ぬよと程り抑おあき
たすすしそおとし山陰の
やひひきぬ火の籠り糸乃
浦くも回り走し今
ハ求る新ルかく草序
年と名をいそ誠工清徳
乃功家穂彦底るり（きれ

いそ堂ん 唱へも越えきく子

混雑

冬の日乃サ日ハ増く牡丹
燐軍や新まの義も枯くおせ

造作愛流の心を

大ろくと冬の日外や鶴牛

試を治ささふり冬の日外

りの答あふんかあさるや学笑満博

平しそく暖るるり家録樂

誤抄

白玉君の御家秘

植直にふとふとやきり松乃也

尾張の系人

松尾小守一一人かおの

巴江良匠の作

根をわくく人をきくは

金毛巻の七ノ鞠

皆松一一人かおの

毒月の七と十

あのもうきくくものや

歌かう二十

梅核二十一人かおの

東武画山下の人

地の務抄を

はるれよ

雨滴子々々おひかり

蘭よりも松やぬ糸は白ひびき

但列松主々四十二

けりえの老く二葉や 松の葉

日光音久々五十頃

十頃一の十半や人乃と

二り地々五十頃

序手ハ枝まがたりか々々 梅

戸出石の流々七十頃

苗はけく一移る菊のぬ

本名大腫々八十頃

花ひき十八二や 春の葉

白玉君の描の痴れを

ぬくとぬくよはく 飛ぶ心はきざ

秋花亭の歌

紙ふぬ 再心研る 流や 砂の勢

まじりあし

廉字了又借了まむめり足跡

千代女う屋よ新しと

おもしろ〜鏡ハ捨るるの目

市前飯あり

色々のまじりてハ名の本ら那

鬼回さる

きききやあ〜〜〜

一馬の夜と好む

あ〜〜〜志よ〜〜

猫子り鳴夜り

年を了何ても毎にかくハお〜

やれの傍ら真つのはを

あの命とよあふハ〜とあのおら

水見の馬十〜は〜の物り

向とふるま〜代ふあ〜のまは〜

下

PLM

三浦のこゝろ入るや

月おそりせぬあのみかとうか

四方伊水き

弓編州くは千浦のなまこつ那

香波忌形人う高申下
おれこ

うたしんしの病おけこりや稲乃ど

新し津南陸き

古跡を編州もあききの月

細波の付馬お勢引

おのるもあまうりこあ月きに

新道市の十奇他小橋を流

一瀬も磨けこお人程おらこ

をとの人が交りこ

岩の水かこらの水やかこつこ

佳全う世路をすまはらこ

かきんりこをりこ
かきんりこをりこ
かきんりこをりこ

可收多

命垣より雲々ぬ人の牡丹や

素女う流る

花より子一葉より風の歌もあは

白雉り五十賀

百鳥もよそ中そよや松の花

清め初年

清んそかりもぬぬの浦す

東武藝多々お花のり

うらひする月日もゆけこ己

屋簷下の名用

春乃も春けしやあまのり

多梅の初光

垣はまも掛りぬもどりの月

寺列流松の松浦の流

流の琴もあはるきや秋の風

長江の河川を

長くともさハ切らさハ花の若

馬場の池を

梅と見よ菊より夏の流

水年羽曲

風中あけそおふハハ年

居を大田の口

長月の乳を

狂吟

春をさる人

かきつてさねハ木ハハ

やうにハ管を

戸の怪よ

いそぎの

居の

待たるぬハ夜の秋まきさうきれ
智種乃以化す多僧ハるん
何れ角も抑るふんをさくま府城
橋了まきりもくけるあ柳
栂杭のまきまおぢおぢ
軍の泣きさるもいかにく
きくくと眠さきか栂の月
音の恨めさくみあるり

多きく又あじあの絶かせん
病つさくくを思ふに
ふんをさくく花のま
おの雛ハまはもあま
名
永もりか人の心の雛めく
堂はけけらるるの古佛
け浦の酒若ハツ月もほく人
お髪も起る年の茶の糸

予、是る人乃月と賞し也
於此の御禮の夕一とありて
きりてお。己の命おしりて
さうりてふし。此の月と賞し
り。此の申す。此の申す
おし。此の申す。此の申す

ルし世おル公うそを御座と
かりぬか片を社中へ一物と
うらむと割副氏をたす
ものたす

安永末の

一人
玉父



安永四年

